



「われわれは獣からの進化のゆるやかな段階によって人間になったといわれる。われわれはかく生まれつき野獣の力を有している。しかしわれわれは、内に存在する神を感得するために人間に生まれた。それは実際人間の特権であり、それが人間を野獣的存在から区別する。即ち神を感得することは、生あるすべてのものに与えられたる特権である。

これはわれわれが自ら進んで肉体的野獣性を捨て、われわれの一人一人の心の中に隠れている真理と非暴力の精神

を自覚して発達させるのでなければ神を感得することはできない。神を感得することは、ただ信心によるより外に方法はない。」

(人類愛の律法、ガンディー・セワ・サンガへの訓誡より)

人間を進化論的に観察すれば、お猿の一種が進化して人間となったといわれる。それ故に人間には野獣性・肉体的暴力が先天的に備わっているのである。

しかれども、すでに人間として進化した特徴は、人間に野獣性があることではなくして、つとめて肉体的欲望・野獣性を自ら点検して、これを統制し振り捨てて、目に見えぬ心の中に隠れている崇高なる神を発見し、礼拝することである。この行為を「宗教」と呼ぶ。宗教活動が人間独特の生活である。人間以外のあらゆる動物には宗教活動がない。

人間社会の進歩発達と称する現象は、いわゆる神の発見と真理の探求の浅深高下の差別標でもある。ガンディー翁は「神の発見と礼拝とは、心の中に隠れたる真理の探求と非暴力の発達によって生ずる宗教的信心の上に行われる」といった。

人間界において最尊重せらるる者は釈迦牟尼仏である。釈迦牟尼仏の尊重せらるるゆえんは、彼が人間界に誕生し、人間界に生長し、人間界に死滅した。彼は一般の人間と同じ生活をしつつ、しかも尊厳無比の仏身を成就せしがゆえである。

釈迦牟尼仏と等しく仏身を成就せしむる本性本質が、我ら人間一切の心中に存在する。これを「仏性」という。涅槃經には「一切衆生悉く仏性有り」と説かれた。釈迦牟尼仏はこの仏性が人間の身に完全に顕現したる存在である。

観心本尊鈔に、この仏性の存在を証明せんがために、妙法蓮華経如来寿量品を引いて曰く、

「寿量品に云く、然も我実成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫等云云。我等が己心の釈尊は五百塵點乃至所顕の三身にして無始の古仏也」云々。

(如来滅後五五百歲始観心本尊鈔 續遺九三九頁)

仏性といえはとて、未完成の仏陀ということではなくして、無始の初めより円満に完成したる仏陀でありながら、しかも人間の心中にあつて、その神通光明が未だ現れないということである。もし己心中の仏性、即ち己心中の古仏の存在を信



ずるとき、わが人生目的も尊厳となり、他の一切の人々に対してもあえて輕慢することなく、ただ礼拝を行うのみである。わが己心の古仏も、他人の己心の古仏も同一体である。

わが己心の仏が他の心中の仏を礼拝するとき、他人の心の仏が他の心中の仏を礼拝するとき、他人の心の仏がわが己心の仏を礼拝する。鏡に向かつて礼拝すれば、鏡の中の影もまたわれを礼拝する。これを「自他不二の礼拝」という。自他互いに礼拝するとき、平和が実現して戦争はなくなる。わが己心の古仏の声は、かつて釈迦牟尼世尊の金口によつて演説されたる八万四千の経典が現存する。しかるに現代文明はその一句一偈をも、見ることもなく、聞くこともない。そこに救いがなき現代文明の苦惱憂患がある。

「一心に仏を見奉らんと欲して、自ら身命を惜まず」

(妙法蓮華経如来寿量品第一六)

この半偈の経文が宗教文明の発祥点である。人間は一塊の肉体的存在たる動物に止まらずして、眼に見えぬ神を、無始の古仏を、平和の真理を見奉らんとするわが一心が、即ち神となり、真理となり、古仏となる。一心を見れば仏也と説かれた。

一心に仏を見奉らんと欲する心が、ガンディー翁のいわゆる人間の特権である。即ち宗教活動である。

(七九年八月三二日、熱海道場にて晩稿)

(文責＝編集部)